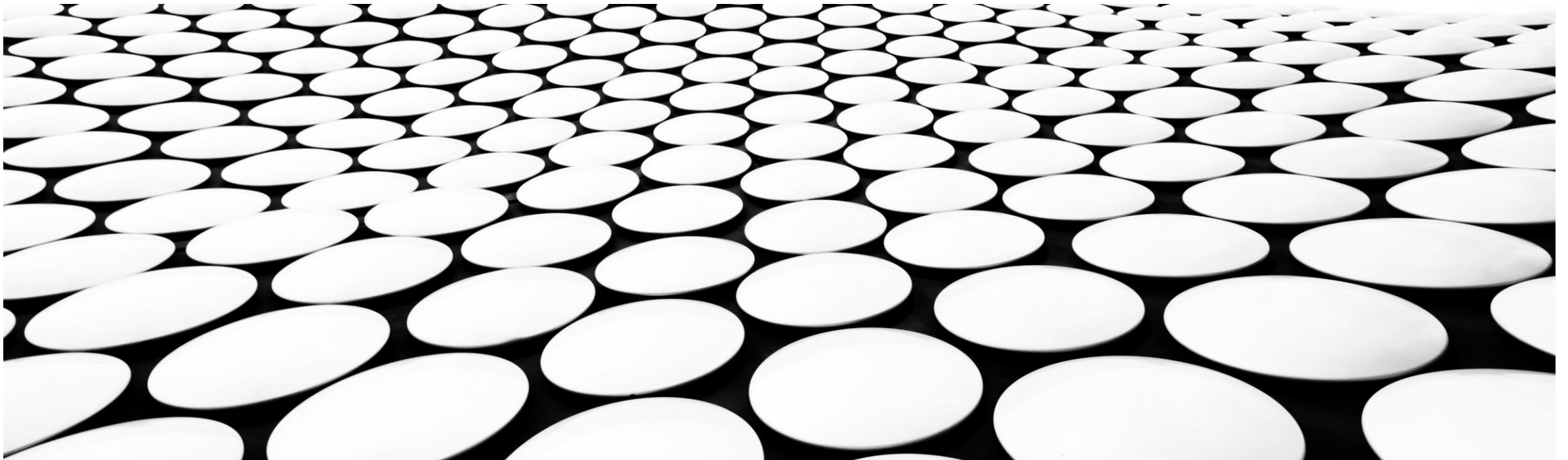


SQIPシンポジウム 製造業がSaaSビジネスに取り組む上での品質保証の考え方

三菱電機 細谷



アジャイル品質マネジメントシステムの上位原則

透明性を保ち説明責任を果たせるチームであるほど、品質ガバナンスを確保するために特別なことをしなくても良い品質マネジメントシステム

- 自律的なリスクベースの品質活動

プロダクトのリスクや特性に応じて、チームが最適な品質活動を自ら設計する

- Doneの定義はガードレール

「最後に誰かがチェックする」のではなく、「何をもって完了（品質確保）とするか」を事前に合意し、それをガードレールとして機能させる

- 品質保証部門の伴走

品質保証部門がゲートとして関わるのではなく、もっとも身近なステークホルダとしてチームに伴走することで、チームが常に品質の透明性と説明責任を果たすことができる

自律的なリスクベース品質活動

プロダクトのリスクや特性に応じて、チームが最適な品質活動を自ら設計する。

【説明】

チームが自ら開発するプロダクトの品質に責任を持ち、自らの目的に応じたリスクに基づき必要な品質を設計し、そのためにどのような品質活動が実施するかを決める。

【事例】

事例	対応する内容
三菱電機	・プロダクトの目的に合わせてテスト設計方針をチームで検討する。 ・Doneの定義をチームが検討する。
富士通 パナソニックコネク	・開発チームが現状行っている品質活動を起点にDoneの定義を合意する。 ・Doneの定義の項目ごとに、リスクに応じて実施要否を開発チームが判断する。

Doneの定義はガードレール

「最後に誰かがチェックする」のではなく、「何をもって完了（品質確保）とするか」を事前に合意し、それをガードレールとして機能させる。

【説明】

従来は、リリース前の第三者テストやフェーズ移行時のプロセス検査などの、後工程でのチェックにより品質を判定する仕組みが主流であったが、リリース頻度を上げるには、チームに権限を委譲する必要がある。チームが設計した品質基準(Doneの定義)を組織として合意し、それをガードレールとすることで、より安全にチームが加速することができる。

【事例】

事例	対応する内容
三菱電機	・チームで検討したDoneの定義を含む計画を開発部門長、品質部門長と合意し、プロダクトオーナーにリリース判定の権限を委譲する。
富士通 パナソニックコネク	・スプリント内でDoneの定義を随時確認し、品質技術者の事前判定 + プロダクトマネージャーの判断によりスプリントレビューでリリース判定する。

品質保証部門の伴走

品質保証部門がゲートとして関わるのではなく、もっとも身近なステークホルダとしてチームに伴走することで、チームが常に品質の透明性と説明責任を果たすことができる。

【説明】

従来は、後工程で品質を判定する仕組みであったため、品質保証部門も後工程で深く変わりゲートとして振る舞うことが多かった。品質基準をガードレールとして機能させるには、品質保証部門がチームと伴走し、チームが自ら品質基準を満たしていることを確認し、必要な対処を素早く実施することで、リリース頻度を上げることを可能とする。

【事例】

事例	対応する内容
三菱電機	・品質保証部門からアサインされた品質技術者がスクラムイベントに参加し、Doneの事前判定を実施する。
富士通 パナソニックコネク	・品質責任者でもある開発責任者が品質技術者としてスクラムイベントに参加し、Doneの事前判定を実施する。